



ブルック・アダムスの膨張思想 : その構造と意味

横山, 良

(Citation)

近代, 96:1-36

(Issue Date)

2006-02

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/00517785>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00517785>



ブルックス・アダムズの膨張思想

— その構造と意味 —

横 山 良

はじめに

現在政治学や歴史学の分野において、九・一一同時多発テロ以来激変した世界情勢のなかでアフガニスタン、イラクへの「報復攻撃」、「先制攻撃」へ突き進むアメリカの姿を歴史的に捉えようとする試みが「帝国論」の形をとって噴出している。また、それに付随して、過去において「帝国アメリカ」を構想したり、予見した政治家や思想家たちがあらためて想起されている。

しかし、このような過去におけるアメリカ帝国論の掘り越しは今回が初めてではない。今回の波は二回目といつて間違いなからう。一回目はいうまでもなく一九六〇年代前後にニューレフト史家たちが、「民主主義国アメリカ」へのアンチテーゼとして立てた「帝国としてのアメリカ」論であった。方法視角においてインテレクチュアル・ヒストリーの影響を強く受けていたニューレフト史家たちが、「帝国アメリカ」を立論するにあたって、アメリカ史上にお

ける「帝国」イデオログの発掘に向かったのは無理からぬところであった。その時、ニューレフト史学の総帥ウィリアム・アブルマン・ウィリアムズ (William Appleman Williams) 自らによって掘り起こされた「帝国アメリカ」のイデオログの一人がブルックス・アダムズ (Brooks Adams) であった。

ブルックス・アダムズは、一九世紀と二〇世紀の交におけるいわゆるアメリカ帝国主義の成立期において、きわめて積極的な海外膨張論を領導し、当時の外交政策決定者に大きな影響を与えた人物であった。⁽¹⁾ それだけでなく、当時彼の置かれていた特殊な社会的地位を背景に、彼の膨張思想を考察するならば、その内政的含意が浮彫されてくる。その意味で、そもそも対外政策論とは単なる外交論ではなく、内政と有機的に結合して、複合的機能をもちうる議論であることを例証してくれる思想家でもある。本稿においては、この「アメリカ帝国」の構想者ブルックス・アダムズを取り上げ、その膨張思想の構造と意味の解明を試みる。この試みを通じて、現代の「帝国論」を含めて対外政策論一般がもつ内政的含意に大方の注意を喚起できれば幸いである。

ブルックス・アダムズは、曾祖父に第二代大統領ジョン・アダムズ (John Adams)、祖父に第六代大統領ジョン・クインジー・アダムズ (John Quincy Adams) をもつ、名門アダムズ家の四代目の末子として、一八四八年ボストンに生を受けた。すぐ上の兄には一九世紀末アメリカを代表する思想家・歴史家ヘンリー・アダムズ (Henry Adams) がいる。彼が活躍したのは、主に、一八七〇年代から第一次世界大戦にいたるまでの時期であり、この期こそは、アメリカ史上の大激動期であった。爆発的な経済発展とそれに伴う社会的騒乱、つづいて、外においては海外膨張、内においては革新主義運動の進展といったアメリカ史を画する出来事が相次いで起こった。この激動の時代に際し、ブルックスは一見誇大妄想とも見えるほどの危機意識を抱き、主に歴史論の側面から真剣な考察を加えた結果、アメリカ救済の道を、アメリカ帝国というビジョン、即ち、海外膨張論の中に見出したのであった。

激動の時代に生きた人間にふさわしく、彼の思想は幾多の曲折に富み、一見、転向と見られがちな部分さえ含まれている。それゆえに、ブルックスは、これまで、史家によって、さまざま、時には相反するようなレッテルを貼られてきた。⁽²⁾しかし、多くの研究が、ブルックスを、激動の時代、エリートの中産階級の中から狂い咲いたエキセントリックな思想家、ないし、自らの生きていた時代を超越した預言者として扱うという共通の限界をもっているように思われる。⁽³⁾ブルックスの思想が、いかにエキセントリックで超越的に見えようとも、それは、決してアメリカ社会から遊離したところで生じたものではなく、まさしく、アメリカ社会の必然的産物に他ならない。それゆえ、彼の膨張思想を当時のアメリカの社会状況の中で考察することは不可欠である。そうすることによって、彼の膨張思想の本質が明瞭になるであろうし、さらに、このような思想を生んだ一九世紀末アメリカ社会の特質の一端も明らかになるう。

本稿の構成は次のごとくである。

第一章では、世紀末のアメリカの社会経済状況を概観する。第二章では、ブルックスの膨張思想の形成と展開を三期に分けて跡付ける。第三章では、ブルックスの膨張思想の構造を分析し、第四章では、ブルックスの膨張思想の意味を考察する。この第三、四章は事実上の結論をなすものである。

第一章 一九世紀末～二〇世紀初頭の社会経済状況

一九世紀末～二〇世紀初頭にかけての時期は、ほぼ周期的に襲来する不況を含んではいたものの、全般的に見ると、驚異的経済発展の時代であった。とりわけ、工業の発展は目覚しく爆発的ともいえるもので、一八九〇年代にはアメ

リカは早くも工業国として世界一の座についた。対外経済も大いに発展し、輸出入とも大幅に増大した。中でも、工業製品輸出の伸張は顕著であり、一八七〇年代以降、ほぼ毎年出超という好調な貿易収支を保っていた。

しかしながら、一八七〇年代、一八八〇年代、一八九〇年代にそれぞれ一回ずつ襲い来た恐慌の波は厳しいものだった。とりわけ、一八九三年から一八九七年まで続いた不況は米国史上未曾有のものであった。後述するように、この不況がブルックスを含め、アダムズ家の人々に与えた影響は計り知れないものだった。この不況も一八九七年には去り、その後一九〇二年まで好況が続いた。

この間、資本と産業の集中は着々と進展し、一八九八年以降の数年間には「トラスト狂熱の時代」と呼ばれるほどであった。なかでも、金融と鉄鋼における独占形成は顕著だった。

このような産業発展、独占の形成に伴い、政治の分野では、「健全通貨」と保護関税を党是とする共和党が実業界と結んで金権政治を展開した。金権政治下での財界と政府、議会、裁判所などとの結託は多くの腐敗を生み、これが大きな社会問題となった。

この状況に対して、国民大衆は多くの改革運動を起こした。農民同盟の台頭、労働組合による激しいストライキなどが続き、一八九二年にはそれまでのアメリカ史上最大の第三政党である全国人民党（ポピュリスト党）が結成された。ポピュリスト党は農民の金融的窮地を救うための「財務省支所設立」構想や銀貨無制限鑄造（フリー・シルバー）などの要求を掲げて戦った。

金権勢力対改革勢力、「健全通貨」対フリー・シルバーの対立は、一八九六年大統領選挙におけるウィリアム・マッキンレー（William McKinley）対ウィリアム・ジェニングズ・ブライアン（William Jennings Bryan）の対立に熱く集約された。ブライアンは敗れたものの、その背後にある改革勢力の力は無視せず、彼らの要求は、二〇

世紀に入って革新主義運動へと引き継がれていく。

対外的には、余剰工業製品のための海外市場獲得の要求が高まり、国民の関心を国内の混乱から外にそらす目的とも相まって、海外膨張が開始された。とりわけ、米西戦争とその戦果は、膨張熱をいっそう刺激した。この膨張思想の指導的牽引者の一人にブルックス・アダムズがいた。

第二章 ブルックス・アダムズの膨張思想 — 形成と展開 —

ブルックス・アダムズは幼時、バラモンと呼ばれるボストン上流階級の中で貴族的エリート教育を施された。一八六一年、一三歳のとき、駐英公使である父とともに渡英し、そこでイギリス流の教育を受けた。後に、彼の関心を世界政策に向けさせた背景には、このような国際経験の豊かさもある。一八六六年に帰国し、ハーバード大学、続いて、一八七一年からは同法科大に学んだ。そこで彼が関心を示したのは、専門の法律のほかに、歴史、哲学、心理学、生物学などであった。一八七三年、彼はハーバード法科大を卒業して実社会に入り、思想、政治の両面においても活動を開始した。

以下、ブルックスの思想家としての活動を大雑把に三期に区分し、その中で彼の膨張思想の形成と展開を辿りたい。第一期は、一八七三年から一八九七年まで。この期の彼の思想は、表面的に見れば、文明論に支配されているように見えるが、ここには、彼の膨張思想の萌芽と、膨張思想をも含めた彼の全思想の発想的原点が見られる。

第二期は、一八九八年より一九〇二年まで。この期は、全き膨張思想の時期であり、ここにおいて彼の膨張思想は体系化された。

第三期は、一九〇三年より第一次世界大戦まで。この期の彼の発言は、国内問題に集中されているが、そこには、アメリカの世界戦略につながる国内政策という位置づけがなされている。さらに重要なことには、アメリカ帝国を指導すべき人間の理想像が提起されている。この期は膨張思想の展開期と呼んでよからう。

第一節 膨張思想の萌芽期

一八七三年、実社会入りしたブルックスはボストンに法律事務所を開いたが、実務には興味を持てず、むしろ政治活動に多く関わり、反金権闘争に加わった。一八七五年には、金権的共和党を脱党し、民主党に移籍し、一八七七年にはマサチューセッツ州議会選挙に出馬したが落選した。一八八四年の大統領選挙では、実業と結びつきの深い共和党のジェイムズ・ブレイン (James Blaine) に対し、民主党のグローヴァー・クリーヴランド (Grover Cleveland) を支持し、いわゆるマッグワンプの一人として戦った。彼はクリーヴランドに、急進勢力と金権勢力の中道ゆく穏健な政治家を見出したのであった。⁽⁴⁾

一八八七年、彼は最初の著書『マサチューセッツの解放』(*The Emancipation of Massachusetts*) を著わした。この本は初期ニューイングランドの歴史を扱ったものであったが、すでに、彼の第二の著作『文明と衰退の法則』(*The Law of Civilization and Decay*) を特徴づける社会進化論の歴史への応用と、歴史の社会心理学的解釈という二つの方法論的特徴が表れていた。⁽⁵⁾

実社会入りして以来、実務、政治、文筆のいずれの分野においても、たいした成功も得らなかったブルックスは、一八八九年、結婚するとともに、ヨーロッパ、中東へと旅立った。彼はヨーロッパでは、遠い中世へと思いを馳せ、さらに十字軍の遺跡を見ようと中東へと足を伸ばし、イェルサレム、シリアを巡った。アメリカの国内における金権

勢力と急進勢力の衝突のもたらす騒乱、自分は失敗したというペシミズム、それにヨーロッパ、中東を巡った体験と感動とが、彼を中世へのノスタルジックな没入に追いやり、そこから、「文明の興亡」のモチーフが生じた。帰国後、彼は文明論の執筆にとりかかった。⁽⁶⁾

この間にも、国内の騒乱は続き、一八九二年には全国人民党が結成された。一方、労働者も数多くのストライキを打った。一八九二年の大統領選挙では、ブルックスは、またしても中道政治家クリーヴランドを支持した。また、このころ、金権勢力と改革勢力の間の争点となっていた通貨問題に関しては、彼は、民主党内の保守的実業人による管理という条件の下で、銀を支持していた。中道政治家クリーヴランド支持の理由にも見られるように、彼が最も恐れていたものは革命であった。ポピュリストをはじめ多くの負債者が要求していた銀貨発行については、もしそれを拒否するならば、革命が起こるであろうことを危惧して、革命を避ける方途として銀を支持したのであった。⁽⁷⁾

一八九三年、アメリカは未曾有の恐慌に襲われた。このあおりを受け、アダムズ家も倒産寸前の危機にまで追い詰められた。このとき、海外にあった兄ヘンリー・アダムズは急ぎキンジのアダムズ家に帰ったが、そこですでに弟ブルックスが書き上げていた『文明と衰退の法則』の原稿を読んだ。兄弟は一八九三年の夏中、『法則』に記された史論について徹底的に議論した。この本はヘンリーの尽力もあって、一八九五年ロンドンで発行され、翌年には、改訂版がニューヨークで発行された。⁽⁸⁾

『法則』は、一言で言えば、古代ローマから一九世紀末までのイギリスを中心とする西欧の歴史を、野蛮から文明へ、あるいは分散から集中へのサイクルの繰り返しとして捉え、その過程は、自然科学の法則によって貫かれていると主張した一種の文明論である。

彼は、序において、野蛮↓文明、分散↓集中のサイクルを貫く法則を以下のように示す。

「力とエネルギーの法則は、自然界において普遍的に適用されうる。…人間の社会も一種のエネルギーの表われである。…いかなる社会の運動速度も、その社会のエネルギーと大きさに比例する。社会の集中化はその社会の運動速度に比例する。つまり、人間活動の速度が増すに従って社会は集中化する。…集中化の初期の段階においては、エネルギーは恐怖に捌口を見いだす。従って、原始的分散社会においては、想像が活発であり、創出される精神の型は宗教的、軍事的、芸術的である。統合が進むにつれ、恐怖に変わって貪欲が支配的になり、経済的組織が感情の軍事的組織に取って代わる。…統合の最後の段階においては、経済的科学的知性が普及し、想像は消え去り、感情的軍事的芸術的タイプの人間は衰退する。…社会の速度が増大し、エネルギー物資の浪費が甚だしく、軍事的創造的系統が自らを再生産しえぬような時点に到達した時には、激化する競争は両極端の経済的タイプを創出する。即ち、最も恐るべき形における高利貸と、乏しい栄養物でも十分に生きうる貧農である。…究極的には、次の二つの結末のうちの一つが起こるであろう。一つは、静止的な時期。それは、戦争、消耗、あるいは、この二つの結合によって終焉する。東ローマはこの例であろう。もう一つは、西ローマのように解体が始まり、文明化された人々は滅び、原始的な形の組織への回帰が起こるであろう。しかし…経済競争の圧力の下で、高度に文明化した社会が解体する時、それは、その民族のエネルギーが消耗しつくされたがためである。…従って、このような社会の生存者は、新しい集中化のために必要な力をもたず、おそらく、野蛮な血の流入によって、新しいエネルギー物質が与えられるまで沈滞の時期が続くであろう。」⁽⁹⁾

次いで、本文の構成は以下のごとくである。第一章…ローマ人、第二章…中世、第三章…第一回十字軍、第四章…第二回十字軍、第五章…コンスタンチノーブルの陥落、第六章…寺院への圧迫、第七章…イギリスの宗教改革、第八章…修道院への圧迫、第九章…ヨーマンの追放、第十章…スペインとインド、第十一章…近代の集中、第十二章…結

このなかで、彼は、初期ローマから中世までを、野蛮↓文明↓野蛮、即ち、分散↓集中↓分散の第一サイクルとして、十字軍から近代西欧までを第二サイクルとしている。近代に関する第十一章、第十二章の趣旨は以下のようなものである。

一八世紀に入って、イギリスを中心として、全西欧に現われた「銀行家貴族制 (banker's aristocracy)」は、一八七〇年代以降、世界的な危機を惹起した。すなわち、一八七〇年代の普仏戦争以後、イギリス、ドイツをはじめとする西欧諸国において金本位制への志向が強まった。全世界的に金価格が高騰し、デフレがおこり、生産者は苦しんでいる。この病弊は、ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアに蔓延した。現代西欧では、あらゆる分野において衰退が強まっている。ローマ亡き後のかつての西欧は、野蛮人の血の流入によって再統合への力を蓄えた。しかし。現代の西欧にはそれは望めない。

以上が『文明と衰退の法則』の主旨である。その思想的特徴を列举すれば以下のようなものであろう。

第一に、明らかな社会進化論の影響。環境決定論、生存競争と適者生存などの觀念が人間社会にも適用されうるとしている。

第二に、社会進化論者にありがちな「絶えざる上昇」の樂觀主義を排し、ベシミスティックなサイクル史觀をとっている。⁽¹⁰⁾

第三に、歴史の社会心理学的解釈。⁽¹¹⁾「分散↓集中」に対応した、「恐怖↓貪欲」の二つの心理。この二つは、それぞれ、創造的精神構造、経済的精神構造を伴う。芸術はこれを如実に反映する。

第四に、歴史に果たす経済の役割の重視。マルクスとの類似が云々される所以でもあるが、生産力と生産関係の觀

点は決定的に欠落している。むしろ、ブルックスの経済的解釈は、商業、それも通貨の果す役割に異常なほどの比重をかけている。また、貿易中心地の移動が、民族の興亡に果たす役割にも注目が払われている。さらに、経済競争と適者生存の観念を統合した「廉価者生存」ともいべき観念がうかがえる。

第五に、ヨーロッパ・コスモポリタニズムとでもいべき傾向。アメリカへの言及は僅かであり、アメリカは、イギリスを中心とする西欧の一部として最小限度の扱いしか受けていない。

このような特色を持つブルックスの文明論であるが、それは、後の彼の膨張思想に徴してみたとき、どのような思想的萌芽を孕んでいたのか。

第一に、貿易中心地の移動が民族の興亡に与える影響についての注目である。彼は、古来より、貿易中心地は、ローマ→コンスタンチノープル→北イタリア諸都市→ネーデルランドと移動し、現在はイギリスにあるとする。彼は、後に、貿易中心地がさらにイギリスを去ってアメリカに渡りつづけると主張することによって、『法則』における、全西欧の没落という命題を否定し、代わりに、イギリス一国の没落とそれに対応するアメリカの優越という命題を立てることになる。

第二に、すでに触れたヨーロッパ・コスモポリタニズムの存在である。このような国際的視野が、後に、彼にアメリカ帝国を発想させたとも考えられる。

第三に、膨張思想のみならず、彼の全思想を貫く根本的立場がすでに明瞭に表れている。即ち、彼がクリープランドを支持し、銀を支持した際の、金権勢力と急進勢力の間に立って双方に反対し、革命を回避するという立場が『法則』にも貫かれている。すなわち、直截に言えば、『法則』は、全西欧的文明論という外被をまといながらも、実はアメリカ国内の金権勢力と彼らの武器である金本位制（通貨収縮）に対する批判の書であった。彼は『法則』の中で、

史上、生産的階層を没落させるに際して、金融資本家と彼らの武器である通貨収縮が果たしてきた恐るべき役割を強調しつつ銀を支持している。⁽¹²⁾ いわば、彼は、「彼の時代の金融資本主義を、それが存在しなかった時代に読み返し」、⁽¹³⁾ アメリカの金融資本家を非難し、銀を支持したのであった。当時における『法則』の受け取られ方と彼の言動がそれを裏付けている。⁽¹⁴⁾ 彼が銀を支持したのは、「革命を避けるため」の一語に尽きることは前述した。それゆえ、『法則』もまた、彼のこの根本的立場に立脚していたのであった。しかも、彼は文明論という、いわば貴族的コスモポリタニズムの高みに立ち、同じ金権批判でも大衆のそれとは異なった次元からの批判を展開することにより、両者の中道を保とうとしたのであった。⁽¹⁵⁾

第二節 膨張思想の形成期

① 不況にあえいでいたアメリカ経済も、一八九七年に入つてようやく回復の兆しを見せ始めた。アメリカはこの後一九二〇代まで続く相対的繁栄の時代へと入っていく。ブルックスは一八九七年頃より、ワシントンにおいて、セオドア・ローズヴェルト (Theodore Roosevelt)、『ヘンリー・キャボット・ロッジ (Henry Cabot Lodge)』、アルフレッド・サイヤー・マハン (Alfred Thayer Mahan) 提督らと親交を重ねていた。ローズヴェルト、ロッジはともに膨張主義者であり、以前からブルックスの友人であった。また、マハン提督は、その著『海上権力の歴史に及ぼす影響』(The Influence of Sea Power upon History) をもつて、世界戦略の理論家として聞こえていた。

一八九八年、米西戦争が勃発した。当時、滞仏中であつたブルックスは、メイン号沈没の報を聞いて「全文明が大揺れしている」⁽¹⁶⁾と感じ、急ぎ帰国した。ワシントンの兄ヘンリーの私邸では例の面々が集い、不安な会話に明け暮れていた。そのとき、マニラ湾海戦勝利の報が入り、ブルックスは喜びのあまり有頂天となつた。彼は、その後ワシン

トンの膨張論者の理論家としてまっぴりあげられてゆく。

一八九八年九月一九日、ブルックスは『ボストン・デイリー・アドヴァタイザー』紙 (Boston Daily Advertiser) とのインタビューで転向声明とも見える発言をした。「私は、戦争と戦争がわが国に強い膨張政策を支持する。私は膨張主義者だ。もし君たちがそう呼びたいなら、帝国主義者だ」、と。それではなぜ彼は文明論から膨張主義へと関心を転換したのか。彼の根本的立場に変化が生じたのか。そうではなかった。膨張主義そのものが、彼の根本的立場である、「革命を避けるため」のものであった。膨張主義は、この時点では、フリー・シルバーの代用品にすぎなかった。彼は、フリー・シルバーを、生産物価格を高騰させ、不況を克服し、かくして革命を防止する手段とみなしていたのだが、戦争は新しい貿易路を開くことによって、所期の目的を達したのだった。⁽¹⁸⁾それゆえ、彼は膨張政策の有効性を認め、これを支持するに至ったのである。

② 彼は、膨張政策を鼓吹する必要性を感じ、その後いくつかの論文を発表していく。それらのうちの六篇を収めたものが、一九〇〇年に出版された彼の第三の著書『アメリカの経済的優越』(America's Economic Supremacy) である。

第一の論文は一八九八年八月『フォーラム』誌 (Forum) に発表された「米西戦争と世界の均衡」(The Spanish War and Equilibrium of the World) である。当論文において、まず彼は、一八一五年以来イギリスにあった「帝国の中心 (the center of empire)」が、一八七九年以降移動を開始し、ここに世界の不均衡が生じたと説き、次いで米西戦争に触れ、次のように主張する。「このように考えてみると、米西戦争によって提起された問題が明らかになる。競争はより強い圧力の時代に入った。競争はその最も尖鋭な形において戦争となる。現今の戦争 (米西戦争) は、おそらく前兆にすぎないであろう。しかし、報賞 (prize) は、このような不均衡な時代の常として、『通商の座』

換言すれば、『帝国の座』である。千年来、文明の中心は西漸してきた。もし前進し続けるなら、それはやがてアメリカを富ませるだろう。反対に後退するならば、アメリカは限界に達するだろう。過去と同じく将来も、衝突は明らかに海上民族と非海上民族との間に、あるいは、陸運と海運の間に生ずるであろう⁽¹⁹⁾。と。次いで、「合衆国は最大の危機に直面している。貿易のための捌口を保持せねばならぬ。さもなければ窒息することになる。この捌口は海運であり、それはイギリスを脅かしているのと同様の連合によって脅かされている」⁽²⁰⁾。それゆえに英米は同盟せねばならぬ。続いて、「攻撃は沈黙より安全であろう。前進なき文明は衰退する」⁽²¹⁾、として、ドイツ、フランス、ロシア等の陸運体制と対決するために、イギリスとの提携を強調し、最後に、「もし、アングロサクソン同盟が成功したならば、世界の均衡は大きく変わり、その時、交易は力強く西漸するであろう」⁽²²⁾、と述べる。

ここにおいて、「崩壊の危機に瀕する西欧」という観念は、「帝国の座」の移動による不均衡と、その中における、「帝国の座」をめぐる、アメリカ、イギリスからなる海上的体制と、ドイツ、フランス等からなる陸上の体制との争いというシェーマに分解している。

第二の論文は、一八九九年四月、『マックルアーズ・マガジン』誌 (McClure's Magazine) に発表された「諸国家間における生存のための新たな闘争」(The New Struggle for Life among Nations) である。ここにおいても、彼はまず、一八七〇年以来、世界の経済の中心地の移動過程に生じた不均衡について触れ、このような時期には、列強は製造品輸出市場をめぐる死活的闘争をするものであり、このことは米国にも該当するとしてこう述べる。「アメリカは、莫大なる工業余剰品の創出を余儀なくされている。もし変化がなければ、それは数年のうちに未曾有の大きさになる。将来は、余剰の存在によって左右されよう。合衆国はその生産物のために確実かつ十分な捌口を与えなければならぬ。さもなければ、合衆国社会は、一八七三年に及び一八九三年のパニック以上の余剰危機に陥る

であろう。⁽²³⁾と。彼は、輸出市場からの排除によって惹起された悲惨な例として、西インド諸島の砂糖業をあげる。さらに、今後、争奪的となる市場は中国市場であり、その確保いかんはアメリカ社会の死活に関わるとする。⁽²⁴⁾

次いで、彼は市場争奪戦に勝利するための戦略を提示する。まず彼は、古来より文明には二つのタイプがあるとする。一つは、東方民族特有の集産的体制、もうひとつは、西方民族の個人主義的体制である。「アングロサクソンは最も個人主義的な民族である。」⁽²⁵⁾しかし、現今のごとく、「膨張が止まり、競争が激化し、価格が低下するにつれて、人々は、より大きいそして緻密なマス (masses) ⁽²⁶⁾に統合する。なぜなら、他の条件が同じなら、最大の『マスの管理』⁽²⁷⁾が最も安価であるからである。」この観点からトラストは是認されなければならない。ドイツ、ロシアの近代化は集産的方法によっている。しかし、アメリカに目を転じるなら、「アメリカはその国民性からして浪費的であり、アメリカの企業と『管理』⁽²⁸⁾はともに古臭く、マスには対応しえず、非効率である。」⁽²⁹⁾「アメリカには近代用語での『管理』はない。」⁽³⁰⁾と決めつける。これまでのアメリカは大陸内での膨張とそこから生ずる国内市場の広さゆえに繁栄してきた。しかし、いまや余剰がはみ出している。それゆえ、「合衆国は『国際貿易の中心』、『帝国の座』を求めて闘わなければならない。」⁽³¹⁾事実、合衆国がイギリス、ローマ、コンスタンチノープル以上の、富と権力の座となっても不思議ではない。そのためには、何よりも、その前提として、「担わねばならぬ重みと、耐えねばならぬ摩擦に対処しうる完璧な組織が必要である。今後五〇年の課題とせねばならないのは、軍事事務双方における、このような組織の完成である。」⁽³²⁾と統治上の集中化を勧告し、結語において次のように言う。「このような集中化は、大トラストが政府を吸収することによって、あるいは、政府と呼ばれる中心的企業体がトラストを吸収することによってたらされるであろう。いずれにせよ、その結果はおおむね同じであろう。東西両大陸は『国家社会主義 (state

socialism)』という完全な体制を目指して競争してゆくであろう⁽³³⁾』と。ここには、国内市場の飽和による余剰の創出、そのための市場の確保の死活的な重要性が切迫感をもって訴えられている。さらに、フレデリック・ジャクソン・ターナー (Frederick Jackson Turner) のフロンティアの飽和に関する学説の系論も伺える⁽³⁴⁾。

それ以上に注目されるのは、アメリカによる覇権獲得、つまり「帝国の座 (the seat of empire)」確保のために提示された彼の戦略である。いわく、「集産主義」、「マスの管理」、「国家社会主義」等々⁽³⁵⁾。ここにこそ彼が単なるジーンゴイストにとどまらぬゆえんがある。世界分割の完了、それに伴う工業製品輸出市場をめぐる経済競争の激化という状況のもとでは、より安価に生産しうるものが勝利を収める。より安価であるためには、分散的統治ではなく「マスの管理」、いわゆる集産主義こそ必須である。彼にとって、集中とは常に安価を意味する。合衆国は「帝国の座」につく可能性大である。しかし、それを勝ち得、担ってゆくには、国内における集中こそ第一義である。トラストもこの点から肯定される。このような海外膨張のための国内統治という命題こそ、以後の彼の膨張思想を貫く基調となる。

続いての論文は、一八九九年六月に『フォーラム』誌 (Forum) 誌に掲載された「西インドにおけるイギリスの衰退」 (England's Decadence in the West Indies) である。この論文においては、以下のように、西インド諸島の没落の原因が追究され、アメリカにとっての教訓が抽出される。

イギリス領西インド諸島の没落は、もとより同島産蔗糖の市場であったイギリスが、自由貿易政策をとることにより、国家奨励によって育成されたより安価なドイツ産ビートを無制限に輸入したためにもたらされた。西インドはドイツとの経済競争に敗れたのである。このような自由貿易策を画するイギリス自体、その国内において、資本家、労

働者ともに、全大英帝国の利益という観点を無視して利己主義に走り、いたずらに安価な食料を求めている。このような傾向は明らかにイギリスそのものの衰退を示すものである。

一世紀前、ティムズ川、セーヌ川の河畔にそれぞれ位置した海上的体制 (maritime system)、大陸的体制 (continental system) の中心は、いまや、前者はアメリカへ、後者はドイツ、ロシアへと分散しつつある。これら二つの体制間の中国市場をめぐる衝突 (戦争) が起こるであろう。「それゆえ、もしアメリカ人がその敵を追いつ落とそうとするなら、より集約的かつ柔軟な組織とより迅速かつ安価なコミュニケーションという方法しかない。」⁽³⁶⁾

ただ、前進あるのみ。西インドを併合し、太平洋への運河を開削し、中米をアメリカの経済体制 (American economic system) の一部とせよ。この強大な経済体制の生産物のための捌口であるアジア市場を確保せよ。さもないければ、我国は西インドのように窒息し、わが国の文明は以前の諸文明のごとく衰退していくだろう。最大の「マスマ管理」が最廉価であるがゆえに膨張と集中化が必然であるならば、アメリカは、その能力の限界にまで膨張し、集中化せねばならぬ。⁽³⁷⁾

ここにも、前論文の主題である「海外膨張競争の大前提としての国内統治」という視点が貫かれている。

第四の論文「自然淘汰と文学に見られる最近のイギリス人の性格の変化」 (Natural Selection in Literature as Illustrating Certain Recent Change in the Character of the Population of Great Britain) (『ハンズロ・サクソン』誌 *Anglo-Saxon* (Sept., 1899) 初出) は膨張主義一点張りのこの期の彼の著作の中では珍しく、文学に題材をとって、イギリス社会の変化とそれに対応した二つの精神タイプの興亡を、ウォルター・スコットとチャールズ・ディケンズを例に論じている。彼は、スコットは感情的時代の嫡子、ディケンズは産業的時代の申し子としている。

第五の論文は「イギリスの衰退」(The Decay of England) (未発表論文、執筆時期不明)である。まず、彼は、例によって、イギリスの衰退によって惹起した不均衡と不安定の中で、アメリカがイギリスに取って代わって重荷を担わねばならず、そのためには、アメリカの統治機構はあまりにも古臭すぎ、再組織化が必要であることを述べる。

さらに進んで、彼は、『法則』を特徴付けていたサイクル史観に代わる「サイクロン史観」とでもいふべき史観を提示している。「前進する文明運動は、他の自然の過程と同じく、自動的であり、抗いがたい。それはサイクロンにでも例えればよからう。最も騒々しいのは中心の渦巻きであり、そこから遠い地点ほど静寂になる。サイクロンの目が去るにつれ、かつての目の位置の騒々しさは消え、完全な静寂あるいは死が支配する。」⁽³⁸⁾サイクロンは史上、チグリス↓コンスタンチノープル↓ベニス↓アントワープ↓アムステルダム↓ロンドンと進路を辿ってきた。今や明らかにサイクロンはイギリスを去りつつあり、イギリスの活気はうせつつある。こうして、現在は不均衡の時代にある。「経済体制の中心は動いている。それが再び落ち着くまで静穏は戻りえぬ。すべての兆候はアメリカの覇権が近づきつつあることを示している。しかし、覇権は常に勝利とともに代償を伴う。勝利の女神は：武器も組織も大胆さも持ち合わせぬ者には微笑んだためしはない。」⁽³⁹⁾

以上、この論文は彼のサイクル史観からの脱皮を決定づけるものとして注目に値する。

最後の論文は「中国におけるロシアの利益」(Russia's Interest in China) (『アトランティック・マンスリー』誌 *Atlantic Monthly* (Sept., 1900) 初出) である。

本論文の趣旨は以下のごとくである。

一八七〇年以後の世界の動揺はアメリカの優越とヨーロッパの相対的没落を惹起した。アメリカの優越は一八九三年のパニック以後顕著であり、工業、鉱業、運輸業ではヨーロッパ市場を支配するに至った。とりわけ、鉱業におけ

るアメリカの優位は動かしがたい。相対的欠乏にあるヨーロッパは鉱物資源を求めて中国へと進出しつつある。とりわけ、その利害から見てロシアは中国に大きく関わっている。われわれは中国においてはロシア並びにロシアとドイツの同盟を警戒せねばならない。ロシアは本来アジア的非効率の国であり、その国内的矛盾を解決するために膨張せざるをえない。しかし、我々は他列強による中国開発からの不当な排除に甘んじはせぬ。「我々の地理的位置、富、エネルギーのゆえに、我々は東アジアの開発に乗り出すことに、そして東アジアを自らの経済体制の一部に加えることに最適なのである」⁽⁴⁰⁾。

③ 以上が『アメリカの経済的優越』に収められた諸論文の要旨である。以下、ここに表れた彼の思想の特徴をあげてみたい。

まず、第一に、何よりも顕著なのは、アメリカの優位、興隆の認識であろう。かつて、没落しつつある西欧の一部としてその死をともしると予見されていたアメリカのイメージはここにはない。彼のこの認識の背景には、米西戦争以後のアメリカの経済的優位と海外膨張がある。

第二に、このアメリカの優位を説明するために、かつてのサイクル史観にかわる「サイクルロン史観」を導入している。通商中心地はひとつのサイクルロンであり、その進行によって諸民族は興亡する。一八一〇年以来イギリスにあった通商中心地はいままたロンドンを離れて大西洋を横切り、アメリカに向かっているとしている。

第三に、一層の海外市場の制覇が必要であるとの認識。彼は、一八九三年恐慌克服の際に工業製品輸出が果たした役割を正しく認識していた。アメリカ大陸は満たされてしまった。一八九三年恐慌のような混乱を招来せぬよう、いっそう製造品輸出を振興することが必須であるとする。

第四に、「廉価者生存」の観念がある。海外市場をめぐる死活的闘争においては、競争相手よりも安価なほう

が勝つとする。これは、進化論の適者生存の概念を経済競争の分野に適用したものである。初期の著作以来顕著な社会進化論の影響はいさかも衰えていない。

第五に、彼の提起するアメリカ帝国のための戦略の特異さ。これは、最も重要かつ注目すべきものである。経済競争に打ち勝つためには、廉価であることが必須であり、廉価であるためには「マスの管理」、つまり集産主義が最適である。この観点からトラストの形態は是認される。アメリカの政治体制もトラストのごとき集中化を図ることによってより経済的、能率的であらねばならない。そのためには、「国家社会主義」がふさわしいとする。前述したごとく、彼は国内秩序を維持するために膨張を支持した。ここに至り、彼はさらに膨張のための国内的集中化を主張する。海外膨張と国内集中化の不可分論、あるいはこの二つの間の相互依存論、これこそが彼の膨張思想の基本的構造である。実際、彼自身「この二つは全体の半分ずつをなす」、⁽⁴⁾といっている。

それでは、彼は文明論から膨張論へと転向したのか。そうではなかった。何よりも、「革命を避ける」という彼の基本的立場は一貫している。⁽⁴⁾さらに思想内容においても、廉価者生存などの社会進化論的色彩、貿易路の転換への注目などは不変である。『法則』と『優越』とでは重点の置き方が違うだけだといつてよい。

だが、ただ一つ、顕著な相違がある。それは『法則』を支配していたヨーロッパ・コスモポリタニズムの消失である。かわりに彼の思考を支配していたものは「アメリカの優越」である。このナショナルな観点こそ、ヨーロッパ中世へ耽溺していった兄ヘンリー、あるいはヘンリー・ジェームズ(Henry James)のような「ヨーロッパ・ルンペン」からブルックスを分かつものである。このような彼の、いわば「アメリカからの逃避」から「アメリカへの復帰」、これは、彼の膨張思想の意味に関わるものであり、後に触れてみたい。

④ 彼は、一九〇二年、第四の著書『新しい帝国』(The New Empire)を出版した。これは前者『優越』が思想

的統一を欠いたため、これを補うべく急遽書かれたものである。貿易中心地、彼のいう「サイクロン」の移動によって生ずる諸国家民族の興亡、「サイクロン」の影響によるアメリカの優越、海外市場をめぐる死活的経済競争の必然性とそれに勝ち抜くための管理の確立の必要性など、「優越」に示されていた基本的観念は不変である。ただ、次に記すような若干の新たな観念が追加されている。

第一に、アメリカの優越の一層の強調とそれに対する自信。「優越」では、サイクロンは大西洋を横切りつつあると控えめに述べられていたのに対し、『新しい帝国』の序の冒頭で彼は次のように述べている。「『エネルギーの座 (the seat of energy)』はヨーロッパからアメリカへ移った。」「一七八九年、合衆国はキリスト教圏の周辺に存在する荒野に過ぎなかった。しかし、今や合衆国は文明の心臓であり、エネルギーの焦点である。』移動しつつあったサイクロンはいまや完全にアメリカに上陸したと彼は確信したのであった。

第二に、彼はこのアメリカの覇権の要因を産業機構における科学の応用に帰している。「アメリカの覇権は応用科学によってのみ可能にされたものである。∴経済とエネルギーの分野において、アメリカの強大な企業による『管理』に匹敵するものは史上類を見ない。それらは科学思想の結果である。』⁽⁴⁵⁾科学的思想の応用とは具体的に言えば、集中による管理ということである。それゆえ、トラストは誉めちぎられる。「一八九三年の危機よりの三年間に、アメリカは統合という手段によって、全社会体制を再組織化した。その結果はいわゆるトラストであった。トラストこそは能率的管理の、したがって経済の最高の形なのだ、⁽⁴⁶⁾と。

第三に、日本に対する高い評価。日本は、アメリカとともにサイクロンの途上にあるとされている。⁽⁴⁷⁾

第四に、政治機構、教育における「総合化」の必要性の強調。彼の言う総合化とは何か。彼は次のように言う。

「将来における成功はまちがいく主¹に急速な『総合化 (generalization)』の力にかかっている。というのは、『管

理』というのはこの『総合化』の實際的側面にすぎぬからである。『総合化』とは個々を知的秩序へと集約する能力のことである。近代社会において生じた『マス』は『総合化』の能力を発揮する最高の形体である。⁽⁴⁸⁾」さらに続けて、『総合化』は柔軟な精神の保持を必要とする。『総合化』はアプリオリなドグマとは相容れぬ⁽⁴⁹⁾、と言う。要約すれば、『総合化』とは状況に応じて柔軟に全体的秩序を保つことであり、『集中による秩序化』のことである。彼は、アメリカの産業機構においては、前述したごとく、その科学的精神のゆえに『総合化』、つまり集中管理が類を見ないほど完璧に行き届いているが、アメリカの政治機構と教育においてはいまだそれは不完全であるとする。

彼は、序文の結びにおいて、経済における「集中による管理」に対応して、政治機構を再調整することこそがアメリカ帝国の運命を左右するとしてこう述べている。

「万一、集中の伝播と発展という事態に適應せぬならば、わが国の政治諸制度は再調整されねばならぬ。さもなければ、社会の全機構は経済体制との断層のゆえに崩壊してしまうかもしれない。…いかなる状況下においてもアメリカ合衆国のような強大な有機体は摩擦を生じざるを得ない。アメリカの産業において、摩擦は資本と労働の間に必ずや起こるであらう。…不完全な機構調整が生じさせた生産コストの僅かな相対的上昇さえも、競争相手を有利にするに十分である。他国製品の方が安価である時、わが国には悲惨な結果が待っている。日々のパンを稼げぬ人々は革命的であり、暴力的無秩序は、貿易の転換とともに始まる一連の惨事を創出する。フランドル、ブルージュ、ガン、イーブル等の大都市の運命はそうであった⁽⁵⁰⁾」と。この言葉の背後には、国内革命を防ぐための海外市場への発展、市場競争に打ち勝つための国内統治の整備という、内政―外政不可分論が明白に表れている。『総合化』の観念は、抽象的機能概念であったが、以後、彼の膨張論は、その機能を有し、アメリカ帝国を指導してゆく人間像の問題へと発展していく。そこには、彼の膨張思想の意味に関わって重要な論点が孕まれている。

第三節 膨張思想の展開期

一九〇三年以後、ブルックスはアメリカの世界政策から国内政策に注意を転換した。政治機構、経済機構、教育、その他アメリカの社会機構全体における、一層の集中化と統合、つまり「管理」あるいは、「総合化」の必要を説き続けた。彼はこれを「社会革命の理論」(the theory of social revolution)と呼ぶ。彼は一九〇一年、マッキンリー大統領の暗殺によって急遽大統領に昇格した親友セオドア・ローズヴェルトの施策に寄与するために数多くの論文を発表した。また、実際に大統領と協議することもしばしばであった。

史家の中には、この期の彼の改革思想を重視し、彼をニューディールの先駆者、あるいは国家統制主義者などと呼ぶものもある⁽⁵¹⁾。しかし、彼の提示した内政改革案にも、すでに指摘した海外政策と国内政策の不可分論が貫かれている。さらに、重要なことに、この理論を実践する指導者の理想像として「総合人 (generalizing mind)」という概念が導入されている。この統治者としての「総合人」の観念の導入は、彼の思想がいまひとつ重大な意味を加えたことを意味していた。このことについては後にゆずり、以下、一九〇三年以後の彼の言動を概観してみたい。

一九〇三年、彼はボストン法科大の講師として迎えられた。以後、彼は、評論家として、教師として、そして、ローズヴェルトの私的相談相手として、自らの思想とその実践を訴えていく。

まず、彼の従来からの思想の基本的構造である内政―外政不可分論は、この期の彼の鉄道問題に対する考え方によく窺える。鉄道規制は、ブルックスがローズヴェルトとともに最も心血を注いだ国内政策の一つであった。一九〇三年には州際通商委員会の権限を強化し、モルガン (Morgan) とヒル (Hill) の鉄道独占を抑圧すべく努力した。一九〇六年には、鉄道運賃の規制を規定したヘップバーン法 (Hepburn Act) 制定についでローズヴェルトに進言し

た。鉄道規制に対する彼の考え方の中には、彼の国内政策に対する基本的姿勢が窺える。たとえば、一九〇三年の規制に際して、彼はロースヴェルトに次のように述べている。「……とるべき方途は君の鉄道規制政策か国有化のどちらかである。中道はない。一言で言えば、我国は、生きるために、西へと通ずる大きな公道を公平な運賃で開放しておき、アジアにある目的地を制さねばならない。失敗したら、我国は崩壊するだろう。」⁽⁵²⁾

アジア市場を確保するために国内交通機関を統制せねばならないというのである。ここにも、内政―外政不可分論が明瞭に見える。

しかし、彼は、鉄道独占を含めて、独占そのものに反対していたわけではない。むしろ彼は独占を不可欠とすら言つて是認していた。ただ、独占を支配する資本家が私利に走りがちであるため、国家利益の立場に立った政府による統制が必要と考えていたのであった。⁽⁵³⁾

さて、彼は、すでに、新しい型の「管理」、すなわち、柔軟性に富んだ中央集権政治が必要であると主張していた。この期に入ると、彼は、そのような「管理」を遂行する人間、即ち、「管理者 (administrator)」の理想像を提出している。彼は次のように言う。

「我々は『人間の新規まき直し』 (new deal of men) を必要としている。痛切に必要としている。我々の唯一の弱点は人間を育成しえていないことである」⁽⁵⁴⁾。とすれば、求められる新しい理想的人間像とは何か。「我々の現状は『専門家 (specialist)』には扱えないものになってしまった。そして、そのゆえに、『専門家』は失敗し、非常に危険な存在なのだ。我々は、いまや、『総合人』を創出しようと試みているのである」⁽⁵⁵⁾、と。

それでは、「総合人」とは何か。それは、彼の第五の著書である『社会革命の理論』 (The Theory of Social Revolution) で明らかにされるので後述するが、彼が「総合人」の具体的な人間像をロースヴェルトに見ていたこ

とは明らかである。一九〇一年、ローズヴェルトが大統領に昇格したとき、ブルックスはこう彼に言っている。「君は最高の、しかも、稀有な宝を得た。というのは、君は機会を得たのだ。君は常にアメリカの覇権を求めて、東方大陸と競争する大統領になるだろう。」⁽⁵⁶⁾ また、彼が兄ヘンリーに「私は、年をとるに従い、『管理的人間』(administrative mind)とは：軍人的な力を持つものであるとの確信を強めている。軍人はまた管理者でもあるのだ⁽⁵⁷⁾、と述べている。ローズヴェルトが典型的軍人タイプであったことから、ブルックスが「管理的人間」の近似形としてローズヴェルトを思い描いていたことは疑いの余地がない。

一九一二年、ローズヴェルトは三選を期して、大統領選に出馬した。ブルックスにとっては、選挙の結果いかんは、アメリカ文明の明暗を分かつものであった。偏向をきたした裁判所を後盾とした利己的資本家が勝つか。公益の立場から資本家を統制する改革勢力の代表としてのローズヴェルトが勝つか。彼はローズヴェルトを応援してこう言っている。「私が今欲し、また常に欲してきたものは、秩序と權威だ。法が平等に施行されぬならば、我々はその双方とも得られぬ。例によって、資本家は、法の不平等な施行―特権―を求めている。今、正しく彼らは特権を得るために法廷を利用している。：資本は常にそれを望む。しかし、そうすることによって、資本は秩序の基盤を侵蝕している。それは混沌を作る。今や我々は混沌に直面している。」⁽⁵⁸⁾

ローズヴェルトが共和党大統領候補の指名争いに敗れ、第三党の革新党を結成した際にもブルックスはローズヴェルトを熱心に支援した。

一九一二年の大統領選において、第三党候補として戦ったローズヴェルトは敗れた。翌年、ブルックスは第五の著書『社会革命の理論』を出版した。この著作は国内政策に関する彼の基本的命題のほとんど全てを含むものであったが、『法則』が一八九六年選挙の 이슈ーと通底していたように、この本も一九一二年選挙の争点を色濃く反映した

ものでもあった。また、ここにおいて彼の言う「総合人」像が明確にされることになる。

彼はまず、「社会は統合化 (consolidation) するに従い、多少なりとも完全に個人本位を廃し、多少なりとも厳格に多くの種類の機能を自ら独占することが、自らの安全に取って不可欠だと悟る」⁽⁵⁹⁾しかし、「社会的統合は単純な問題ではない。なぜなら、社会的統合とは、それに見合った管理能力を意味する。」⁽⁶⁰⁾それでは管理とは何か。「管理とは、多くの、往々矛盾する社会的エネルギーを、単一の組織体の中において調和させる能力のことである。」⁽⁶¹⁾「管理における進歩とは、新しい統治階級の台頭を前提とする。」⁽⁶²⁾しかし、「資本家は余りにも特殊化されており、狭小な私的利益にのみとらわれて、社会関係、とりわけ、鉄道関係のような根本的社会関係すら理解しえぬ」⁽⁶³⁾「もし資本が、委託に伴う責任を負う事なく、主権を行使し続けるなら、現存秩序に対する反乱が継起するに違いない」⁽⁶⁴⁾「その意味で、資本家は本質的に、無意識の革命家である」⁽⁶⁵⁾それゆえに、「明らかに、近代社会は、高度の『総合人』即ち、多数の複雑な諸問題を把握する人間を持たねばならない。しかし、これは、高くつき、少数しか創出されぬ人間なのである」⁽⁶⁶⁾

以上から読み取れるごとく、「総合人」とは、外においては国際競争に打ち勝ち、内においては革命を避けるために、公益の立場から、複雑な集中化社会を統率して行くエリートの人間にほかならない。「総合人」とはまた、『社会革命の理論』が一面において、一九二二年に資本家(専門家)と闘ったローズヴェルトを擁護する意味を持っていたことからわかるように、ローズヴェルトに代表される階層、即ち、ブルックスを含めた旧中産階級の人間であったことは明らかである。こうして、内政―外政不可分論を基幹とする彼のアメリカ帝国の構想は、自らが属する旧中産階級を「総合人」として帝国の指導者の位置につけることによって一応の完結をみたのである。

一九一四年、第一次世界大戦が勃発した。彼は絶対中立の立場をとった。だが、彼は孤立主義者などではさらさら

なかった。彼は、中立をアメリカが国内の政治経済体制を集産化へと再組織化し、国防を固め、国力を強固にするための時間稼ぎとみなしていた。⁽⁶⁶⁾

アメリカは参戦した。一九一七年より一九一八年まで、ブルックスはマサチューセッツ州憲法制定会議に参加し、彼の従来からの諸改革案を披瀝し、並みいる代表を驚かせた。彼の提案の背景には、参戦した戦争に勝つための国内体制の強化という切迫した考慮があった。

独裁制にも似た行政の極端な優位、イニシアティブ、レファレンダム、比例代表制に基づく一院制議会等がその具體的提案であった。⁽⁶⁷⁾

戦争は終わった。彼はウッドロー・ウィルソン (Woodrow Wilson) の国際連盟案もベルサイユ条約もともに、ウィルソンと国際銀行家との結託による陰謀だとして激しく非難した。その後、彼はベシミズムの度を深めていった。⁽⁶⁸⁾

一九一八年、兄ヘンリーが死去し、翌年には親友ローズヴェルトも逝った。一九二七年、ブルックス・アダムズは孤独のうちにこの世を去った。

第三章 ブルックス・アダムズの膨張思想の構造

以上みてきたブルックス・アダムズの膨張思想はいかなる構造と意味をもっていたのであろうか。本章においてはその構造を、次章においてはその意味を考えたみたい。

すでに指摘したように、彼の海外膨張の構想は、その前提としての国内改革の構想と分かちがたく結びついていた。

海外膨張によってナショナル・インタレストを追求するには、統一的集中的かつ能率的な国内統治が前提であり、逆に、統一的国内統治は、世界的優位を得ることによって可能となる。双方は互いに相互補完的關係にあるものとして捉えられていた。

ブルックスのような内政―外政統合論は、当時の西欧の政治・社会思想においては決して目新しいものではなく、イギリスのフェビアン主義から労働党に連なる流れやドイツの社会民主党につながる系統のなかにも見られたいわゆる「社会帝国主義」論に通底する思想であった。アメリカでもセオドア・ローズヴェルトやハーバート・D・クロリー (Herbert D. Croly) をはじめ類似の思想を持つものがいたが、ブルックスこそは、このような思想のアメリカにおける先駆者であり牽引者であった。

しかし、ブルックスの内政―外政統合論には、他とは異なる一つの構造的特色があった。すなわち、内政と外政を統合した国策を遂行する国家指導者の理想像として、ローズヴェルトをその近似形とする「総合人」という概念を付加したことである。国家統治のあらゆる部面における極端な集中の複合・重層は、ついには、その超集中的統治機構の頂点において、国家を統治すべき、寡頭的ないし独裁的指導者（あるいは指導層）の存在を必然化する。その寡頭的独裁的指導者こそ、「総合人」であった。膨張思想をも包含する彼の思想全体を表す言葉をあえて選ぶとすれば、「寡頭支配的社会帝国主義」論とでも呼ぶべきであろうか。

第四章 ブルックス・アダムズの膨張思想の意味

それでは、ブルックス・アダムズの膨張思想はいかなる意味をもっていたのか。まず、すでに指摘したように、彼

の膨張思想の根底には、国内的無秩序と国内革命を回避するという堅い動機が存在していた。急進勢力と金権勢力の間にありながら、その双方を嫌悪し、中道を求めつつ、革命を回避すること、これこそ、彼の全思想を貫く発想的原点であった。彼は資本家を罵った。が、それに劣らず民衆と急進勢力を嫌悪した。それゆえ、彼はブライアンとも改革勢力とも共闘しなかった。双方の中間にあつて彼はひたすら革命を避けようとした。

しかしながら、彼の膨張思想は単に革命を避けるという消極的意味しかもっていなかったわけではない。前章において指摘したように、膨張論をも包括する彼の政治思想が「寡頭支配的社会帝国主義」とでもいふべきものであったこと、なかんづく、複合的、重層的集中社会の頂点に立つべき指導者あるいは指導階級として「総合人」を提起していたことは、彼の膨張論に今一つの重要な意味を付加するものであった。「総合人」とは、セオドア・ローズヴェルトやブルックス自身の属する階級、すなわち、エリート的旧中産階級そのものを指すものであった。彼は、己の属する階級こそ、この激しい国際競争のなか、よくアメリカ帝国を領導しうる階級であると主張したのであった。彼の内政―外政統合論、集中的社会論は、その論理的帰結として、一つの階級に、独裁的支配権への道を開くものであった。その階級こそ、まさに、旧中産階級であった。その意味で、彼の膨張思想をも含めた政治思想は、単に革命を避けるという消極的意味のみならず、ブルックスの属する階級にアメリカ帝国のヘゲモニーを掌握させようとするものでもあった。ここにこそ、彼の膨張思想のすぐれて積極的な意味がある。

これに関連して言うならば、『文明と衰退の法則』における、ブルックスのヨーロッパ・コスモポリタニズム、いわば「アメリカからの逃避」から、『アメリカの経済的優越』以後に見られるアメリカ優越論への転回、いわば、「アメリカへの回帰」は、実は、彼の政治思想が、革命回避という消極的意味から、帝国の主導権掌握という積極的意味へと意味転換したことを示すものであった。彼はいみじくも、自らの構想する国内諸改革を総称して「社会革命」と

呼んだ。しかし、「地位革命 (status revolution)⁽⁸⁹⁾」における相対的没落者としての彼の立場に徴するならば、「社会革命」とはまさに、反「地位革命」と同義であった。

むすびにかえて

以上見てきたように、ブルックス・アダムズの膨張思想（帝国論）は、一見対外政策の装いをとりながら、内政―外政統合論を媒介にして、国内社会の再編成を提起するなかで、自らの階級の復権を計ろうとするものであった。

そもそも、外交あるいは対外政策は国民大衆の目の一番届きにくい政策領域である。逆に言えば、エリートの指導者が最も自由に専権を揮える独擅場でもある。こうして、国内において権力を掌握できなかったり、権力から排除されているエリートは外交あるいは対外政策というチャンネルを通じて宿願の達成を試みる。ブルックスの対外膨張論は正にそのようなものであった。

今日進行するグローバル化、とりわけ情報の世界同時化のなかで、外交あるいは対外政策のエリートによる囲い込みや隠蔽は、かつてほどたやすくはなくなっている。しかし、なお、国民にとって最も遠い政策領域であることは、選挙の際の「外交は票にならない」という常套句によっても伺い知ることができる。現在噴出している様々な「アメリカ帝国」論についても、そのような角度からの検証も必要なのではなからうか。

【註】

(1) ウィリアム・アブルマン・ウィリアムズはブルックス・アダムズがセオドア・ローズヴェルトの膨張政策に大きな影響を与えたこと、ならびに、ブルックスが兄ヘンリー・アダムズを通じてジョン・ヘイに影響を与え、門戸開放宣言の形成に寄与したことを論じている。注(3)参照。

(2) ヴァーノン・パリンントン (Vernon Parrington) はブルックスを「戦闘的非体制派」(militant nonconformist) マーシャル・アロン (Daniel Aaron) は「似非革新主義者」(pseudo-progressive) チャールズ・ハーシフィールド (Charles Hirschfeld) は「ナシヨナリスト」パリンントン・アンダーソン (Thornton Anderson) は「建設的保守主義者」(constructive conservative) と評している。

(3) 以下先行研究を概観してみた。最も早くブルックス・アダムズを評価したのは、Vernon Parrington, *Main Currents in American Thought*, vol.3 (New York, 1930) である。パリンントンはブルックスを戦闘的非体制論者と呼び、人道主義的楽観主義者と経済的楽観主義者の双方をたたく懷疑主義者とみている。続いて、ブルックスにアメリカ思想上重要な位置を与えるよう主張したのは、C. A. Beard, "Introduction to Brooks Adams *The Law of Civilization and Decay*" (N. Y., 1951) である。彼は、五〇ページにも及ぶ長文の序文の中で *The Law* 形成の過程を綿密に追究し、この書がブルックスの独創であることを論証し、さらに、自分自身のブルックスの文明論に対する批判を加えた。Henry Steel Commager, *The American Mind* (New Haven, 1950) はブルックスをシヨヴァニスト、アメリカ最初の地政学者と呼び、ファシズムの先駆者ともいふ。Daniel Aaron, *Men of Good Hope* (New York, 1951) はブルックスの思想を金権勢力と革命勢力の間で革命を避けるためのものだといふ。Thornton Anderson, *Brooks Adams: Constructive Conservative* (Ithaca, 1951) はブルックスを計画経済を抱いていた点でファシストとは異なるといふ。Arthur Beringhouse, *Brooks Adams: A Biography* (New York, 1955) はブルックスについての初の本格的伝記である。「帝国としてのアメリカ」史の文脈でブルックスを位置づけ直したのが William Appleman Williams, "On the Restriction of Brooks Adams,"

Science & Society, vol.20 (Summer, 1956); Do, "Brooks Adams and American Expansion," *The New England Quarterly*, vol.XXV (June, 1952) など。 Charles Hirschfeld, "Brooks Adams and American Nationalism," *American Historical Review*, vol.LXXIX, (January, 1964) はブルックスの思想の分析にあたってナショナリズムや社会帝国主義の概念を導入した。

管見の限り、最近ブルックス・アダムズについてのまとまった研究は現れていない。ただ、様々な形でアメリカ帝国やその成立・展開を論じた著作のなかで言及されている。たとえば David M. Pletcher, *The Diplomacy of Trade and Investment: American Economic Expansion in the Hemisphere, 1865-1900* (Columbia, Missouri, 1998); Amy Kaplan, *The Anarchy of Empire in the Making of U.S. Culture* (Cambridge, 2002); Neil Smith, *American Empire: Roosevelt's Geographer and the Prelude to Globalization* (Berkeley, 2003) など。

邦語文献は少ない。清水博「アダムズの歴史観」『アメリカ思想史』第三卷（日本評論社、一九五〇年）、高橋章「ブルックス・アダムズー帝国の夢想家」『アダムズ家の人々』（創元社、一九六四年）が主要な先行研究であった。最新の研究成果である高橋章「ブルックス・アダムズの『アメリカ帝国論』」（高橋章『アメリカ帝国主義成立史の研究』（名古屋大学出版会、一九九九年）所収）は先駆的コーポラティストとしてブルックスを捉えている。

(4) Aaron, *op.cit.*, 266.

(5) Brooks Adams, *The Emancipation of Massachusetts: The Dream and the Reality* (Boston, 1887). この本は建国の父祖を口汚く罵ったとして世間に受け取られ、彼は「とりわけボストンの人々から厳しい非難を浴びた。しかし、彼は自らの真意を親しい人々にこう吐露している。「この本は、本当はマサチューセッツの歴史ではなく、孤立し、自由に動きえた小地域社会を例にとつての、文明進歩における人間の心の動きについての、形而上学的、哲学的考察である。」「それはビュリタンをこきおろしたり、聖職者に罵詈雑言を浴びせようとするものではなく、我々が人間の肉体の動きを追求するように、人間の心の動きを追及しようとしたものである。」(Aaron, *op.cit.*, 250-57.)

- (9) *Ibid.*, 257-58.
- (7) *Ibid.*, 266.
- (8) Brooks Adams, *The Law of Civilization and Decay* (London, 1895, New York 1896; Reprinted, New York, 1951.) 従来『法則』の理論には兄ヘンリー・アダムズの影響が強いといわれていたが、ビアーは、利用している史料を綿密に分析し、『法則』はブルックスの独創になることを実証している。この点については、C. A. Beard, *op. cit.* 参照。
- (6) Brooks Adams, *The Law*, 59-61.
- (10) 彼がオスワルド・シュティングラーやアーノルド・トインビーのサイクル史観の先駆をなしていたことは、C. A. Beard, *op. cit.*, 3; Rushton Coulborn, "Review of *The Law of Civilization and Decay*," *American Historical Review*, XLIX (October, 1943), 77 参照。
- (11) ブルックス・アダムズはハーバード時代、ウィリアム・ジェイムズ (William James) から心理学とその歴史への応用を学び知った。Anderson, *op. cit.*, 37-38.
- (12) たとえば、彼はこう言っている。「豊富な通貨は、それ自身で、商業的繁栄を創出するものではないが、商業的繁栄と通貨収縮とは一致しがたい。というのは、通貨収縮が始まり、価格が下がると、生産者と負債者は没落させられるからである。」(Brooks Adams, *The Law*, 286-87.)
- (13) Anderson, *op. cit.*, 198.
- (14) 当時『法則』は、資本家と共和党を非難し、フライアンと民主党を擁護したものと受け取られた。それゆえ、共和党「健全通貨」派のベンジャミン・テリー (Benjamin S. Terry) はブルックスを徹底的に批判した。一方フライアン派からは喝采を浴びた。親友ローズヴェルトもフライアン派に偏っていると批判した。(Beard, *op. cit.*, 43-50.) また、この本の公刊意図については、彼は兄ヘンリーにこう言っている。私はこの本を「哲学的考察あるいは学問的理論」として提供したくない。私はより広範な民衆に読んでもらいたい。「…私の最大の希望は、社会主義者、銀支持者、負債者に読んでもらうことだ。」と。(Ibid.,

9,n.3.)

- (15) 『法則』に見られる民衆への嫌悪については、クールボーンが、ブルックスの思想と、オルテガ・イ・ガセットの『民衆の反叛』の思想との類似性を指摘している。Coulborn, *op. cit.*, 77.
- (16) Beringause, *op. cit.*, 160-61.
- (17) Anderson, *op. cit.*, 75.
- (18) *Ibid.*, 76.
- (19) Brooks Adams, *America's Economic Supremacy* (New York, 1900), 12.
- (20) *Ibid.*, 19.
- (21) *Ibid.*, 24-25.
- (22) *Ibid.*, 25.
- (23) *Ibid.*, 32.
- (24) *Ibid.*, 43.
- (25) *Ibid.*, 44.
- (26) マス (masses) はブルックスが好んで使う概念である。「集合体」あるいは「集魂」の意であろうが、そのままマスと訳した。
- (27) 「administration」という概念もブルックスは好んで使う。一般に「管理」「統治」などと訳される。一般に前者は主に企業体に関して、後者は政治機構に関して使われる訳語である。しかし、ブルックスの *administration* という概念は、この「管理」「統治」の双方の意味を併せ持ったものである。彼は政治における「統治」は、企業における「管理」のごとく合理化され、集中化されたものであるべきだと考えている。
- (28) *Ibid.*, 45.

- (29) *Ibid.*, 47.
- (30) *Ibid.*, 48.
- (31) *Ibid.*, 51-52.
- (32) *Ibid.*, 50.
- (33) *Ibid.*, 52-53.
- (34) 『のちの歴史』 Walter LaFeber, *The New Empire: An Interpretation of American Expansion 1860-1898* (Ithaca, 1963), chap.2 "Intellectual Formulation" 参照。
- (35) 一八九九年ドイツ滞在中、彼は兄にエドゥアルト・ベルンシュタインの本を送り、自らも、社会主義運動の指導者と思想家に接触しようとした。このことから見ても、彼が社会主義、しかも修正主義にかなりの興味を持っていたことがうかがえる。
 (Beard, *op. cit.*, 38.) また、ヘンリー・ブルックス兄弟の社会主義への傾斜については James P. Young, Henry Adams : *The Historian as Political Theorist* (Lawrence, 2001), 183-85 も参照。
- (36) Brooks Adams, *Supremacy*, 83.
- (37) *Ibid.*, 85.
- (38) *Ibid.*, 145.
- (39) *Ibid.*, 192.
- (40) *Ibid.*, 221.
- (41) Hirschfeld, *op. cit.*, 377.
- (42) ハーシュフェルドも、ブルックスが、膨張論を銀に代わるアナキーの回避策とみなしていたと結論づけている。(*Ibid.*, 376.) また、一八九六年の民主党全国大会で、ブライアンが大統領候補に選出されたとき、ブルックスは「革命」の恐怖すら感じ、ブライアンを「最も空っぽで、愚かで、虚栄心の強い青二才」と罵ったことから、この頃いかに彼が革命と急進勢力を恐

- ないうたふなふな⁸⁰ (Aaron, *op. cit.*, 261; Beringause, *op. cit.*, 147-49.)
- (43) Brooks Adams, *The New Empire* (New York, 1903), XI.
- (44) *Ibid.*, 15.
- (45) *Ibid.*, 11.
- (46) *Ibid.*, 175.
- (47) 彼は、「近代日本は近代アメリカと同じく、『エネルギーの座』と鉱産物の中心地の西漸の結果」である (*Ibid.*, 160) として「日本はイギリスとは逆に、『サイクロンの通り道の上に位置している。』」 (*Ibid.*, 202) という。さらに、彼は、日露戦争を予見している⁸⁰ (*Ibid.*, 186.)
- (48) *Ibid.*, 210.
- (49) *Ibid.*, 211.
- (50) *Ibid.*, 33-35.
- (51) ハーバート・A・アンダーソン, *op. cit.*, chap. VIII 等。
- (52) Aaron, *op. cit.*, 272.
- (53) Hirschfeld, *op. cit.*, 382.
- (54) Aaron, *op. cit.*, 271.
- (55) *Ibid.*, 271.
- (56) Beringause, *op. cit.*, 204.
- (57) Aaron, *op. cit.*, 272.
- (58) *Ibid.*, 273.
- (59) Brooks Adams, *The Theory of Social Revolution* (New York, 1913), 20.

- (60) *Ibid.*, 207-08.
- (61) *Ibid.*, 204-205.
- (62) *Ibid.*, 210.
- (63) *Ibid.*, 29.
- (64) *Ibid.*, 210.
- (65) *Ibid.*, 217.
- (66) Hirschfeld, *op.cit.*, 386.
- (67) *Ibid.*, 387-88.
- (68) *Ibid.*, 383-89.
- (69) 「地位革命」の概念については、R・ホーフスタッター『改革の時代 農民神話からニューディールへ』（清水知久他訳）（みすず書房、一九六七年）、第四章「地位革命と革新主義の指導者たち」参照。

（本稿は平成一五―一八年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)による研究成果の一部である）